
夏だ！ 海だ！ そして恋だ！！

戸張飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏だ！ 海だ！ そして恋だ！！

【Nコード】

N9560U

【作者名】

戸張飛鳥

【あらすじ】

イツシュ地方有数のリゾート地・サザナミタウンに繰り広げられるアニポケ歴代ヒロインによるサトシ争奪戦・・・

その結末やいかに・・・

（前書き）

これは天の河が見つけたサイト『水面の波紋』の管理人・戸張飛鳥さんからの頂き物小説です。

注意

- 1 ・作者名はそのまま、戸張飛鳥さん名義にしています。
- 2 ・キャラ設定は、『水面の波紋』のキャラ設定に準じております。
- 3 ・他者作品なので、もちろん無断転載禁止です。

イツシュ地方で1番であろうリゾートエリア・サザナミタウン。

その町はサザナミ湾を前にし、夏にはあちこちの地方からたくさんの観光客が赴き、たくさんの人達が海水浴で楽しむことで有名である。

だから、町にはそのためのホテルや別荘が多く建てられていた。

また、サザナミ湾には海底遺跡があることで有名で、多くの考古学者や研究者、さらには冒険家などといった専門家が海底遺跡を目的にサザナミタウンに訪れていた。

そして、今年も太陽がサンサンと照りつける夏。

サトシ達も海水浴でこのサザナミタウンに訪れていた。

のだが、

「サトシは今からあたしと泳ぐのっ!!」

「いいえっ、私とスイカ割りをするの!!」

「ダメーッ! サトシはあたしとビーチバレーをするの!」

「違うわよ! アタシと一緒にボートに乗るの!!」

かれこれ30分、女の子達・カスミ、ハルカ、ヒカリ、アイリスは
ずっと同じことでやめそうにない言い合いをやっていた。

それを呆然と見つめる男子達・サトシ、タケシ、デント。
そしてポケモン達。

そんな光景が、サザナミタウンのビーチにあった。

彼女達が言い合う理由はただ1つ。

「誰がサトシと遊ぶか」である。

ことの始まりは30分前。

日が上ってサンサンと照りつけ始めて間もない頃にサザナミタウンに着き、ポケモンセンターに荷物を置いて、早速水着に着替えて「さあ泳いで遊ぶぞ！」と意気込んだ時。

今 이슈と一緒に旅をしているアイリスが、

「サトシ、ボートで海底遺跡のあるところまで行かない？」

と、借りてきたのであろうボートを浮かべながら聞いてきた。
「サトシだけ」に、だ。

何故か？

これはアイリスの作戦だった。

ボートに乗れば、ポケモンが居ようが居まいがは置いといて、必然的にサトシと2人きりになる。

あわよくば、想いの人と何か進展できるかもしれない。

アイリスはそう考えたのだ。

その作戦が成功したのか、サトシは「ボート」という楽しい娯楽と「海底遺跡」という未知なる興味に目を輝かせた。

「いくいく！何だかワクワクするし、面白そう！」

そうはしやぎながら、サトシはピカチュウを肩に（やはりピカチュウを連れていくのだがそれは仕方がないとアイリスの心中）アイリスの方へと走った。

だがその目論みは、彼女達が当たり前のようになに早く気づいた。

そしてそうはさせるかと、彼女達の1人が早速阻止にすべく行動に出た。

「サトシ！せっかく海に来たんだし、まずは泳ぎましょ！ボートはその後乗ればいいじゃない」

そう言っで出たのは、カスミ。

カスミはサトシの腕に抱きついて、華麗なウイंकをしながらサトシを引き止めた。

サトシは「え？」と戸惑いアイリスはいきなり鉄砲玉をくらったように「はっ？」と言うような顔をした。

そしてアイリスはすぐにジト目でカスミを睨んだ。

だけどその視線をカスミは無視して、サトシは全く気づいていない。気づいているタケシとデントは1歩後ろに後退りをした。

「ええゝっ、でもオレ早く乗りたいし、海底遺跡も見たいしなゝ」

そうサトシは困ったようにボートをチラリと見た。

そのボートの横でアイリスはすぐにペアと顔を明るくさせてうんうんっとなげき、逆にカスミは不満そうに唇を尖らせた。

「だってせっかくこんなにも綺麗な海に来たのよ？そんな海を目の前にして泳がないなんて……しかもサトシ、着いたら1番に泳ぐ！なんてことアンタ言っでたじゃない」

最もといえば最もな言葉である。

現にサトシはそんなことを楽しそうに言っていた。

サトシは「そうだけど」と言葉を詰まらせ、迷うように視線を泳がせた。

「ねっ」と言ってカスミは満面の笑みを浮かべて、アイリスは再び顔をムスツとさせた。

想いの人を巡^{サトシ}って何だか軽くバトルな雰囲気へとなっていく。

そんな中、更なる提案者が3人の間に入り込んできた。

しかも2人。

その内の1人がカスミが抱きついている反対側のサトシの腕に抱きついてきた。

「サットシ 泳いだりするその前に、わたしと一緒にスイカ割りしましょ！腹ごしらえした後の方がさらに元気に遊べると思うかも！」

語尾に「かも」とつける口癖があるのはサトシの仲間の中でただ1

人、ハルカだ。

2人からサトシを取られないよう阻止すべく、2人とは違う提案を投げ掛ける。

いかにもハルカらしい提案だが、まだ朝と言える時間帯にスイカ割りには
なんていう考えは彼には全く効かなかった。

サトシは「スイカ」という単語に目を輝かせた。

「スイカ！？やるやる、すっごくやりたい！……でも肝心なスイカはあるか？」

そう聞くと、ハルカはフッフッフッとわざとらしいような笑い声を
出して、満面の笑顔で、

「もっちろん、ちゃんとしてスイカは持ってきてるわ！食べ物
のこと、抜かりはないかも」

さすがはハルカというところか。

それを聞いて、サトシの顔がさらにパアと明るくなった。

「さっすが、ハルカ！」

「じゃあ早速っ」

ハルカはサトシの腕を引いた。

どうやらハルカの方に勝利の旗が上がった

↓

かに見えたが、

それを彼女達が許すはずがない。

「ちょっと待った！サトシは今からあたしと一緒に泳ぐの！」

そう言つて、カスミはサトシを自分の方へ引き戻そうとサトシの腕を引いた。

サトシの体がカスミの方へと傾く。

「うわっ、ちよっカスミっ？」

「……カスミ、邪魔しないでほしいかも」

「それはこっちのセリフ。そっちこそ邪魔しないでほしいわ」

バチバチツと激しく火花を散らして睨み合うカスミとハルカ。

そんな2人に、サトシは訳がわからなくて困惑した視線を交互に2人に向けた。

さらに、

「ちょっと、サトシを最初に誘ったのはアタシよ！邪魔しないほしいのはこっちのセリフなんだけどっ！」

そう強く言って、アイリスはズカズカと大股でサトシ達に歩み寄った。

その気迫に、サトシはうつとたじろぎ、タケシとデントもまた1歩と後退りをした。

だが、カスミとハルカは静かに強く睨み返して、

「順番なんて関係ないかも！だいたいわたしには抜け駆けにしか見えなかったわ」

「そうよ。サトシと一緒に泳ぎたいのは本当なんだから、後先どうであれ誘うのはあたしの勝手でしょ！」

「わたしも同じかも！わたしが先に、サトシとスイカ割りするの！」

「ダメ！アタシが先よ！」

3人でさらに火花を散らせる。

背景にはゴウゴウと燃える炎の幻覚まで見えてきた。

グググ…ツと睨み合う3人に、タケシとデントは顔を引きつらせ、ポケモン達はその凄さに恐怖した。

そして、その3人に挟まれているサトシは、3人が何故こんなにケンカするのか自分が原因であるという理由すらわからなくて、ただ呆然とするしかなかった。

さらにさらに、そんな修羅場の中に、

「ちょっとちょっとーっ！あたしをほっという勝手に取り合いしないでよーっ！！」

そう叫んで、今までほつとかれた形で3人のサトシの取り合いを見ていたヒカリが、我慢の限界と言わんばかりに入ってきた。

サトシの腕に抱きついていくカスミとハルカを無理やり引き剥がして、自身がサトシの腕に抱きつく。
威嚇するかの如く3人を睨み付ける。

それを見て、当然カスミとハルカ、そしてアイリスは顔をさらにムスツとさせて睨み返した。

いきなり抱きついてきたヒカリに、サトシはパチパチと目を瞬かせた。

「ヒ、ヒカリ…？」

「ちょっとヒカリ、サトシに抱きつかないで欲しいかも！」

「そうよ、あとあたし達の邪魔しないでほしいわ！」

「早く離れなさいよ！」

「いーやーでーすーうー！それにカスミとハルカも抱きついてたじゃない！」

「いやです」の1句1句の間を長くのばして言って、べえと舌を見せてヒカリは、

「それに、サトシと先に遊ぶのはあたしだもん！」

と、強く言い放った。

当然女の子3人は意味がわからないと言わんばかりに「はあっ？」と声を上げる。

サトシも何のことだ？という視線をヒカリに向けた。

ヒカリは「えっへん！」というように胸を張って、

「だってここに来るまでにあたし、サトシと約束したんだもん。『サザナミタウンに着いたらすぐに、あたしと一緒にビーチバレーやるうね』って」

ね、サトシ と、ヒカリは満面の笑みをサトシに向けた。

そう言われて、サトシは「あー」と思い出したような声を洩らした。

「確かにそんな約束した、思い出した」

「ねーっ、でしょ？ちゃんと指切りもしたよね？」

「うん、した」

「なのにサトシったら忘れちゃって、ヒドーイ！」

「う、ゴメンってっ」

ブクウツと頬を膨らませるヒカリに、サトシはあわあわと慌てて謝る。

遊ぶ約束に指切りをする光景。

なんとも微笑ましいものだが、カスミ達にとっては羨ましいことこの上ない。

目の前のまるでカップルみたいなやり取りにも、腹が立つ。

さらに激しくメラメラと燃え盛る炎の幻覚が見えそうなほどの3人の気迫に、サトシとヒカリ以外の仲間全員がズサササツという効果音が聞こえそうなほどの後退りをした。

彼女達の行動は、決まっていた。

指切り？

そんなことなど彼女達にはなんの効果もない。

3人係りで勢いよくヒカリをサトシの腕から引き剥がした。動きはピツタリで、ヒカリは呆気なくサトシから離れる。

驚くヒカリだったが、すぐに3人を睨んだ。

「いきなり何するのっ！」

「それはこっちのセリフよ！何あたし達に内緒でそんな約束してるのよ！」

「そーよっ、それ抜け駆けかも！」

「抜け駆けじゃありませんーっ！ちゃんとした約束よや・く・そ・く！」

「そんなのアタシ、ぜえったい認めないんだから！」

「とにかく！サトシはあたしと泳ぐの！あんた達は後から遊べばいいじゃない！！！」

「いいえっ、わたしが先かも！スイカ割りをするの！！！」

「だからダメ！あたしが先に約束したから、ビーチバレー！！！」

「そんな約束ナシ！ていうか皆ダメ！サトシはアタシと先にボートに乗るのーっ！！！」

バチバチと火花を散らしまくって、ぎゃあぎゃああと怒鳴り言い合いをする4人。

それをサトシは呆然と、他の仲間達は止めるのが怖くてできなくて眺めるしかなかった。

そして30分後、現在に至るという訳である。

未だに4人の言い合いは続いていた。

これだけ長く続くのは、ある意味すごくて逆に感心するものだ。

サトシ達も遊ぶことなく、だが止めずにそれを眺めた。

もし止めたり、ほつといて自分達だけで遊んだら、後が怖い。

特にサトシが危ない、確実に。

すると、

「サトシ!!」

「はいっ!?!」

いきなり4人が言い合いを止めて、揃えてバツと勢いよくサトシの方を向いて、声を揃えてサトシを呼んだ。

サトシは肩をビクウツと跳ねさせて、思わず上ずった返事を出した。

呼ばれていない仲間達も肩を揺らして驚く。

4人はサトシにズイッと近づいて、

「「あたし（わたし・アタシ）達の中で誰と遊びたい!？」」

「……………え？」

声を揃えて一斉に聞かれてサトシは顔をポカンとさせるしかなかった。

.

4人はさらにズイッとサトシに近づいて、サトシを取り囲むようにして前方を陣取った。

「サトシはあたしと海に泳ぎたいわよね？」

と、カスミ。

それに首を振って、ハルカが、

「いいえ、スイカ割りかも。わたしとやるわよね？」

「違うわよ、あたしとビーチバレーするの。ちゃんと指切りしたもんね？」

小指を立てて、ヒカリは言った。

それを見てアイリスが、

「そんなのナシ。サトシはアタシとボートに乗るの」

「さあっ、どうするの！？サトシ！！」「」

またズイッと近づき、サトシに迫る。

サトシは「えゝえ…」と洩らして、心底困っている顔をした。

「「サトシ！！」「」

早く決めてと言わんばかりに、4人は迫る。

逃げ場がない、だが決めてと言われても…。

サトシは本当に困ってしまった。

「これはまずいな…」

「あれじゃあサトシに自由がなくて、サトシがかわいそうだ」

状況を見るタケシとデントが言った。

止めなければ、これは長引いてしまうだろう。

「うーん、だが…」

あんな修羅場とも言える状況を止めることができるであろうか。
いや、できないだろう。

あんな凄まじく火花を散らして好きな人を巡って争う女の子達を、
部外者であろう自分達が止めるのはできない。

それに、すごく怖い。

それが他の仲間達の心中だ。

だがしかし、このままにしておくのはいけない。

未だにサトシは困り、女の子達4人は睨み合っている。

本当に悩んでいたその時だった。

「あれ、もしかしてタケシ？」

「あら、ひょっとしてタケシ君？」

2つの声が、タケシを呼んだ。

「え？」と、タケシは声のした方に振り向く。
つられてデントも振り向いた。

するとそこには、見知った2人が立っていた。

1人はヒカリの好敵手^{ライバル}にして若きトップコーディネーターである赤毛の少女。

もう1人はシンオウ地方の最強・チャンピオンである金髪の美女。

「ノゾミ...と、シロナさん!!」

2人を、シロナを見た途端タケシは素早く駆け出してシロナの手を握った。

目は2つ共ハート。

.

「こんな遠いイッシュ地方にまで美しいシロナさんに会えるなんて、自分は今すごく運命を感じて...ッ」

と、いつものタケシのナンパの言葉が言い終わる前に

ドスッ!

いつものストッパーであるグレックルの『どくづき』が鈍い音をたててタケシの腰に見事に決まった。

「シ、痺れえ〜.....」

タケシは全身をヒクヒクさせながら倒れ、グレックルは「ケツ」と吐き捨ててタケシを引き摺って行った。

「タ、タケシ…」

まさかなタケシの一面を目の前で見て、デントは呆然と引き摺られて行ったタケシを見送った。

「改めて、ボクはデントと言います。以後お見知りおきを」

「あたしはノゾミ、よろしく」

「シロナよ。よろしくね、デント君」

互いに自己紹介をするデントとノゾミとシロナ。

ちなみにタケシはグレックルの『どくづき』から復活していた。

「いやあ、それにしてもまさかシンオウ地方のチャンピオンであるシロナさんに会えるなんて、とても光栄に思います」

「…そう言えば何故こんな遠いイッシュに？ノゾミも」

タケシは2人に聞いた。

確かにイツシュはシンオウから遠い。

しかもシロナはシンオウのチャンピオン。

聞かれたシロナは、サザナミ湾の方を見つめて、

「私はサザナミ湾の海底遺跡を調べに来たの。前から興味があったから」

以前シロナはシンオウの神話や伝説を調べていると話していた。

だから、シロナがそういう歴史の類いに興味があることをタケシは知っている。

「あとは観光かしら、せっかくイツシュで1番のリゾートビーチに来たのだから」

「あたしも観光かな。イツシュ地方のポケモンは他の地方じゃ見れないし」

そう言ったノゾミの視線には、コアルヒとスワンナが優雅に大空を飛んでいた。

「そう言うタケシはなんでイツシュ地方に？」

「海水浴に、夏だし。今サトシがイツシュ地方を旅してて、お誘いがきたんだ」

「へえ、そうなんだ。じゃあ、デントは今サトシと？」

「正解、一緒に旅してるんだ」

「やっぱり。……で、そのサトシは何であんな状態に陥ってるの？」

そう言つて、ノゾミは少し引き気味の表情を浮かべて「あんな状態」を指差した。

女の修羅場はまだ続いていた。

未だに言い合いを続ける女の子4人とそれに囲まれ困っている哀れな男の子1人。

.

「あ、忘れた」というような表情をするタケシとデント。
シロナは目をぱちくりとさせた。

「まあ、ケンカ？」

「ちよつと、あれ見てないで止めなよ。サトシ本当に困ってるよ」

ノゾミは呆れたように言った。
それに2人は苦笑で返す。

「そう言われてもなあ…」

「まあ、どうせ何らかの理由でサトシを巡るケンカになったんだろ
うから、止めるにも怖くて無理なんでしょうけど」

さすがノゾミさん大正解。

この少女の鋭い勘は今でも健在だな、とタケシは改めて感心した。

すると、それを聞いてシロナは、

「まあ、じゃあサトシ君はモテモテなのね。フフ、確かにサトシ君
はかっこよくて優しくて良い子だものね」

綺麗な笑顔を浮かべてにこやかに言った。

あの状態を見てそんなことをのんびり言われても、とタケシとデン
トは思った。

この人はどこか抜けているような…。

「そうですね、サトシはそついう子ですから」

そして呑気にそのことに納得しないでくれ、ノゾミ。

横でシロナと同じくらいにこやかな笑みを浮かべているノゾミに、
2人は心の中で突っ込んだ。

「…で、のんびりおしゃべりするのは後にして。あの子達がケンカする理由は何？」

「えっと、誰が最初にサトシと遊ぶか。しかも途中からサトシに問い質^{タタ}してるんだよね」

デントは苦笑を浮かべて言った。
それにノゾミは心底呆れたと言うような顔で返す。

「まるで子供のケンカじゃない。あたし等は子供だけど、それよりもっと低い子供のケンカ」
「まあ、そうだよな」

ノゾミは額に手をあて、深いため息を吐き出した。
そして顔を上げて、言い合いの方を見る。

「しょうがないね、あたしが丸く収めてくるよ」

「え、ノゾミが？」

「あのままじゃきつと埒^{ラチ}が明かないし、サトシが可哀想だよ。あた

しが止めてくるよ」

「それに、あの子等には少しショックみたいなものを与えないと……ね」

そう意味有り気な言葉を告げて、にこりと笑みを浮かべて、ノゾミは言い合いをしているところへと歩いて言った。

「「……ショック？」」

タケシとデントは顔を見合わせた。

『ショック』とは、一体どういふものなのか？

ただ1つわかることは、ノゾミのあのにこやかな笑みは本当に楽しそうにしている、ということだ。

「泳ぐのー!!」

「スイカ割りかもー!!」

「ビーチバレーー!!」

「絶対ボートー!!」

終わりを知らない言い合い（もう争いに近いレベル）を目の前に、サトシはどうすることもできずに途方に暮れていた。

どれにするか決めると言われても、困ってしまう。サトシはできれば全部やりたいのだが……せめて、今自分が今考えている案を彼女達が賛成してくれたらいいのだが。

だが、言うのが怖い。

雰囲気的に絶対賛成してくれないと思う、絶対。

「さあ、サトシー!」

「早く決めてほしいかも!」

「そうよ!」

「さあ、早く!」

「えー……」

そんなこと言われても……と口ごもるサトシ。本気でこんなにも誰かに助けて欲しいと思ったことはないかもしれない。

本当にどうしようかとサトシが思っていたその時、

「コラッ、あんた達。サトシが困ってるでしょ」

不意に聞こえてきた聞き覚えのある少女の声。

まさかこのイツシュ地方で？と驚いて、サトシと、ヒカリとハルカはそちらの方を見た。

一方、こちらは初めて聞く声にカスミとアイリスは3人につられるように見た。

そこにいたのは腰に手をあてて呆れたようにサトシ達を見ているノゾミだった。

「「「ノゾミ!?!」」」

「「「え? 誰??」」」

思ってもいなかったノゾミの登場に、サトシとヒカリとハルカは思わず彼女の名前を叫んだ。
だが、ノゾミとは初対面であるカスミとアイリスは首を傾げるしかない。

ノゾミはため息を1つ吐いて、サトシ達に歩み寄る。

「ノゾミ、何でここにっ？」

「観光だよ、あんた等と同じ」

「そうなんだ、本当にビックリしたかもっ」

「あたしもだよ、まさかヒカリ達もイツシュに来てるなんて」

「本当に久しぶりだな！」

シンオウでの旅以来の再会に喜ぶ4人。

そして、ノゾミは顔をポカンとさせているカスミとアイリスの方を見た。

「初めまして、あたしはノゾミ。ヒカリと同じコーディネーターだよ」

「あ、初めまして。あたしはカスミよ」

「アタシはアイリス！よろしくね、ノゾミ！」

2人に笑顔でよろしくと言うノゾミ。

だが、すぐに笑顔を引っ込めてヒカリ達女の子4人を見つめた。

「にしてもあんた達、何やってるんだよ。タケシ達から事情は聞いたけど、サトシを困らせてどうするの」

ノゾミの言葉は最もで、4人はうつとたじろぐ。
だが、

「だってノゾミ、カスミ達がっ」

「ちょっ、あたし達が何って言うのっ!？」

「そうかも、ヒカリだってっ」

「それなら皆っ」

「あー、はいはい。もうわかったから、もう言い合いはいいから」

額に手をあてて呆れてノゾミは再び4人の言い合いを止める。
4人はしかめっ面になった。

サトシはというと、反射的にカノゾミの後ろに隠れるようにいつの間にか移動していた。

ノゾミもサトシを庇うように前に立つ。

それを見て、ヒカリ達の顔がさらにムウとなる。

分かりやすい反応に、ノゾミはさらに呆れてため息をついた。

「あのねえ、サトシと遊びたくてそれで言い合いになるなら、やり

たいことを順番に”皆で”やればいいじゃない」

「「……え？”皆で”？」」

ヒカリ達は目をぱちくりとさせて、声を揃えた。
ノゾミは頷いた。

それにサトシが、

「あ、それオレも思った」

「皆でやりたいことを皆でやった方が楽しいし、それにあんた達はサトシと一緒に遊べればそれでいいんでしょ？」

「「うつ……」」

「え、何で？」

何故自分と一緒に遊べればそれでいいのかわからなくて、サトシはきよとなる。

一方、凶星を突かれた4人は一気に顔を赤くさせる。
そしてそれを振り払うように首を激しく振って、

「でもあたしはサトシと！」

「それはわたしも同じかも！」

「あたしも皆とだなんて！」

「絶対いや、アタシもいや！」

提案を真っ向から否定した。

その勢いに、サトシはまた反射的にノゾミの後ろに隠れた。

さすがにここまでなっ^てめんどくさくな^ったのか、ノゾミは深い^いため息を吐いて

「あんた達さあ、もう少しサトシのこと考えてあげなよ。あんた達のわがままばかり聞いてたら、サトシの自由がないしサトシが可哀想だよ」

「「うつ…」」

そう言^って、ノゾミは慰めるようにサトシの頭を撫^でた。
再びたじろぐ4人。

ノゾミの姉御肌が、4人の言い合いを簡単に静めてしまった。

サトシや、他の仲間達は思わず感心してしま^った。

「ほら、わかったなら返事。それとサトシに謝る」
「「はゝあゝい。サトシ、ゴメン」」

まだ少し納得していないような返事だが、サトシに迷惑してしまったことはちゃんと理解して反省しているようだ。
4人は素直にサトシに謝る。

「あつ、ううん、別にいいぜ。気にしてないし。だけど今度は皆で仲良く、遊んで楽しもうぜっ」

そう言つて、サトシはニツコリと笑った。

その笑顔に、4人の顔がパアと明るくなる。
頬も赤く染まる。

それを見て、ノゾミは「やれやれ」と苦笑を浮かべた。

「さすがはノゾミだな」
「本当、ノゾミさんはすごいね」
「あれだけ長く騒いでいたのに、簡単に宥めるなんて」
「これでもう大丈夫だな」
「そうだね」

事の成り行きを見守っていたタケシ、デント、シロナそしてポケモ

ン達はホッと息をついた。

これで一件落着。

と思いきや。

今度はどの遊びを先にやるかで4人はまた言い合いを始めてしまった。

それでサトシやポケモン達が途方に暮れ、タケシとデントとノゾミが頭を抱えそうになったのは言うまでもない。

END

おまけ

「…オレ、ノゾミみたいにお姉さんみたいな女の子の方が好きかも」

「サトシっ!?!」

「へえ、じゃあ将来あたしと結婚する?」

「え、結婚?」

「ダメーエ!?!ちゃんと話し合うから、結婚はダメエエエ!?!」

「???」

「フフッ」

と、サトシの好み(?)が明かされたようだ。

今度こそEND

（後書き）

いかがでしたか、『主人公総受け物語』とは違った世界観。

戸張飛鳥さん、すてきな作品をありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9560u/>

夏だ！ 海だ！ そして恋だ！！

2011年7月19日15時01分発行